

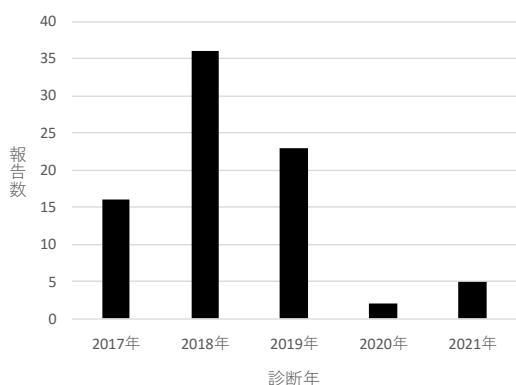
## 【今週の注目疾患】

## 《A型肝炎》

2021年第44週に市川保健所管内、安房保健所管内の医療機関よりそれぞれ1例ずつA型肝炎の報告があった。性別では男性1例、女性1例であり、年代はいずれも70代以上であった。

2021年の県内におけるA型肝炎の累計報告数は5例となった。過去5年間の県内におけるA型肝炎発生報告数は、2017年から2019年までは16例から36例であったが、2020年は2例と大きく減少し、本年も報告数が少ない状況が続いている(図)。また、年代別は、2017年から2019年までは20代から40代が半数以上を占めていたが、2020年、2021年は全ての患者が60代以上であった(表)。

図：2017年から2021年第44週までの県内A型肝炎報告数 (n=82)



表：2017年から2021年第44週までの県内A型肝炎年代別報告数

	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年
10歳以下	1	1	0	0	0
10代	1	0	1	0	0
20代	4	11	7	0	0
30代	5	5	3	0	0
40代	0	11	4	0	0
50代	2	5	4	0	0
60代	0	3	2	1	1
70代	3	0	2	1	2
80代以上	0	0	0	0	2
合計	16	36	23	2	5

A型肝炎はA型肝炎ウイルス(HAV)感染による疾患である。一過性の急性肝炎が主症状であり、治癒後には強い免疫を獲得する。HAVは糞便中に排泄され、糞口感染で伝播する。旅行者が海外で感染するほか、汚染された食品や水などを摂取することによる経口感染<sup>1)</sup>、性的接触により感染する場合もある<sup>2)</sup>。

潜伏期間は2~6週間であり、発熱、倦怠感などに続いてALT、ASTが上昇する。食欲不振や嘔吐などの消化器症状を伴うが、典型的な症例では黄疸、肝腫大、濃色尿、灰白色便などを認める。まれに劇症化して死亡する例を除き、1~2か月の経過の後に回復する。慢性化はせず、予後は良好である。しかし、成人では小児に比べ、臨床症状も肝障害の程度も強い傾向にあり、加齢とともに重症化の割合が増えることから、高齢者の感染には注意が必要である<sup>1)</sup>。また、HAVは発症約2週間前から発症後数か月まで長期に糞便中に排泄されるため、感染者は発症前から感染源となり得る<sup>2)</sup>。

近年の日本においては、HAV感染が少なく、抗体保有率が非常に低下していることから、患者が発生した場合には、施設内の集団発生や家族内感染等二次感染への予防が重要である<sup>1)</sup>。

予防としては、患者の排泄物や汚染食品等の適切な処理、手洗いの励行など一般的な衛生管理のほか、食品は85°C1分以上、十分に加熱調理をすること、塩素剤等による消毒などが基本となる。また、ワクチンによる長期間の発症予防が期待できることから、A型肝炎蔓延地域への旅行者、医療従事者、慢性肝疾患患者などの高リスク者にあっては、ワクチン接種を受けることが望ましい<sup>2)</sup>。

■参考

1) 国立感染症研究所：A型肝炎とは

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/320-hepatitis-a-intro.html>

2) 国立感染症研究所：A型肝炎 2015～2019年3月現在

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/hepatitis-a-m/hepatitis-a-iasrtpc/9107-475t.html>